



TITLE:

コペルニクの言葉

AUTHOR(S):

山本

CITATION:

山本. コペルニクの言葉. 天界 1940, 20(230): 249-253

ISSUE DATE:

1940-05-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168005>

RIGHT:

コペルニクの言葉

學曆一五四三年、一代の碩學コペルニクは De Revolutionibus Orbium Coelestium といふ表題の大著を公にし
ました。譯すれば天體の廻轉運動についてとなります。彼は此の書中に初めて地動説を提唱し、過去二千年の天動説
の傳統に改革を要求したのでした。こゝに其の第一卷の總論を譯して掲げます。(譯者 山本生)

世の中のいろ／＼さま／＼な學問や藝術など、皆これは人の心の活動によつ
て生み出されたものでありますが、私は、其れ等のうちでも特に、此の宇宙の
最も美しく、最も尊貴なる對象を取り扱ふ種類の學藝を心から貴び、感激と最
上の熱心とを以つて追求しつゝあります。即ち、これは、大世界の神秘的廻轉
や、星々の運行、出現、没入、其のほか、種々の天空現象、それから宇宙全體
の形狀に至るまで論及する學術であります。美なるものの總てを包含する天よ
りも美なるものが、一體ありませうか? Caelum (空) 及び Mundus (世界) とい
ふラテン語そのものが、既に、天界の清淨と美觀と、地界の完成した姿態とを
それ／＼意味してゐます。その高貴と絶大なる尊嚴のために、昔から多くの
學者は此れを「現し神」と呼びました。此の故に、學藝の品位を、それが常に
取り扱ふ對象の如何によつて價值づけるべきとすれば、世の人々が天文學、又

は占星學と呼ぶもの、又は昔の人ならば、數學の奧義とも呼ぶものが、づぬけて、最高のものであります。まことに、天文學は、あらゆる學藝の頭領として、總ての文化人に尊まれ、又、數學の凡ての部門から支持されてゐます。算術、幾何學、光學、測地學、機械學、その他、尙ほ多くの學術も皆天文學と關係してゐます。若し、人類を罪惡から開放し、より善良に向けしめることが、あらゆる學藝の本來の目的であるならば、天文學は、單に人の心を奇しくも淨化するることのほかに、過度にまで此うした効果を擧げることも出来るのです。神の最高最善の秩序に基礎づけられた此の宇宙を、熱心な觀察と確信ある熟達とを以つて研究する者は、誰だつて、神の攝理が最上にまで及ぶを認識し、あらゆる美と善の創造主を讃美しないで居られませうか？ 若し、吾々が天文學に導かれて、最高神の觀念に達しないのならば、昔の詩人が、神の創造を歡喜し、其の聖業を讃美したことも、結局、無駄でありませう。天文學が（個々の人に與へる夥しい利益は、姑く度外視して）國家に對して如何なる効用と榮譽とを與へるものであるかといふことは、プラトーンが既に良く説き明しました。彼

の「法律篇」の第七卷には、天文學が一日一月一年等の時の關係によつて、祭禮や休日^{きうじつ}を定^{さだ}むることにより、國家に活氣^{くわつき}と正氣^{せいき}とを與^{あた}へるものであることが記され、尙ほ、誰でも、若し最高の學識^{がくしき}を欲^{ほつ}する者に、およそ天文學が必要でないと言ふ者があるならば、それは甚だしき愚者^{ぐしや}であるとも書いてゐます。又、およそ太陽や月や星に關して必要な知識^{ちしき}を有^もたない者は、世に偉大なりと仰^{あふ}がれる人物^{じんぶつ}とは言へないといふ意見を、プラトーンは有^もつてゐました。

この、人間的^{にんげんてき}といふよりも、むしろ神聖^{しんせい}なる天文學^{てんもんがく}は、最も高尚^{かうせう}な對象^{たいしやう}を研究^{けんきう}するものであると共に、其の研究^{けんきう}上には或る困難^{こんなん}を避^さけることは出来ませぬ。殊^{こと}に、此の學術^{がくじゆつ}の研究^{けんきう}者は、其の原理^{げんり}や想定^{さうてい}に於いて、かのギリシヤ人^{びこ}たちが「憶說^{おくせつ}」と呼んだものについては、多少の一致^{ちち}を缺^かき、計算^{けいさん}上にも合致^{がっち}しない場合^{あひ}が少^{すく}くありません。尙ほ又、星^{ほし}の運行^{うんかう}や、諸遊星^{しよゆうせい}の週轉^{しうてん}だつて、皆^{みな}それ／＼時日^{じじつ}と關連^{くわんれん}し、先づ多くの實地^{じつち}觀察^{くわんさつ}が行はれ、それ等^らが、漸次^{ぜんじ}、後の時代^{のじだい}へ、人の手^てから手^てへと傳^{つた}へられ、遂^{つい}に確實^{かくじつ}な數値^{すうち}に表^{あら}はされて、完全^{くわんぜん}な學術^{がくじゆつ}の形式^{けいしき}

となるのであります。

昔、アレキサンドリヤのクラウデオ・トレミーは、實に驚くべき熟練と叡智とを以つて、他に秀でた偉傑であります。が、四百餘年にわたる先人の觀測結果を利用して、天文學を最高の完成にまで導き、もはや之れ以上、何ものも殘す所無しとさへ思はれる域に達したのであります。が、しかし、現代の吾人から之れを見ますと、彼れトレミーの全く知らなかつた新發見が行はれたが爲に、今は、彼れの學說に合はないものが多くあるのであります。この故に、かのプルータルクは、太陽曆のことを論じた際に、「今や、星の運行は、數理學者の智力に打ち克つた」と言つたことがあります。この「一年」の例について言へば、昔と今とで、如何に甚だしく吾人の觀念が變つて來たかといふことは、既に多くの人々が、確實な計算の可能か否かを疑ふほどになつてゐると、私は思ひます。しかしながら、私は決して困難だといふ言ひわけの蔭に、自分の弱さをかくさうとはしないつもりであります。むしろ、こゝに私は神の助け（神助

なしには吾々は何事も出来ないのです）に依り頼みつゝ、此の問題を、遠く他の遊星にまでも説き及ぼしたいと思ひます。何となれば、吾々は天文學の創始者自身が有つてゐたよりも更に永い年代にわたつて研究材料を有ち、又、吾々自身が新しく行つた觀測もありますために、此等の材料を昔のものと比較することによつて、吾々の理論を一層有効に立證することも出来るのですから。更に、私が茲に特に一言したいことは、私の研究は、この天文學に最初の道を付けて呉れた昔しの大先輩たちの道を歩みながらも、尙ほ、この先輩たちの説と違つた多くの新説を有つてゐるといふことであります。

譯者註。この空前の大著の一部を今茲に讀まれただけでも、およそ今の天文學書と、四百年前の此の天文學書との間に、一々數へ難き多くの違つた氣分があるといふことに讀者は氣が付きませう。一は、勿論、時代の違ひであり、又、環境の違ひでもあります。尙ほ一つ見逃し難いのは、學者其の人の見識や氣魄の違ひであります。天界の巻頭隨筆に私が幾度も書きましたやうに、昔の學者は常に廣い人生の視野を見渡してゐたために、實に展びやかであり、又、氣分が生きてゐます。學問をしつゝ、心は常に人生や宇宙のあらゆる姿に映じてゐます。之れに反して、今の學者は、視野がせまく、些細な技術に馳り、一ケの人といふよりも、むしろ自ら一ケの精密器械たる意識に墮してゐます。大局から見ても、學者の墮落といふべきです。（山本）